

霊山登拝の旅日記に人生儀礼を読む

— 富士山を中心にして —

西 海 賢 二

- I. はじめに
- II. 富士山と富士講
- III. 『富士道中小遣覚帳』に通過儀礼を読む
- IV. おわりに

I. はじめに

2013 (平成25) 年 6 月, 富士山 (信仰の対象と芸術の源泉=富士講・信仰習俗・造形) が世界文化遺産になったことを心のどこかで喜んでいる日本人は多い。しかしその反面, 今後富士山の文化 (無形文化) が消滅していくのではという危機感をもっている人も少なからずいる。私もその 1 人である。本報告では 1855 (安政 2) 年 7 月 20 日より 8 月 2 日までの『富士道中小遣覚帳』(筆者蔵) から上野国の若者たちの通過儀礼などを紹介しつつ, 富士山をめぐる庶民文化を考えてみたい。

山伏の真似事をはじめて 40 年余り, 筆者が「法螺を吹きつつ」先達をし, いざ「六根清浄」。あわせて日本の歴史上きわめて眉唾的で歴史の舞台では過小評価されている富士導者 (修験者) たちのしたたかに生きた世界を「民間信仰としての人生儀礼」との関わりで紹介する。

II. 富士山と富士講

近世初頭頃より, 富士の行者によってはじめられ, とくに 1733 (享保 18) 年 6 月に食行

身祿 (じきぎょうみろく) が富士山の 7 合 5 勾において入定を行ったことを契機にして, その後, 江戸市中を中心に組織された富士信仰を母胎とする集団を富士講と称している。

古代, 中世のいわゆる修験者の苦行を重ねる「行」を中心とした山岳信仰から近世山岳信仰の形態は大きく様変わりして, 一般俗人が自由に登拝するようになったことで, それが人々に代参講を簇生させる結果ともなった¹⁾。

日本の山の象徴的存在で在り続ける富士山 (3,776m) は, いつでも庶民信仰の対象となった。とくに関東農村を中心に富士講の結成をみたのをはじめ, 江戸市中では, 江戸時代中期以降, 八百八講と称されるほどの爆発的な富士講の結成がみられ (図 1~3), これと連動して 18 世紀中葉以降には, 小型模型としての富士山である富士塚が多数築かれた²⁾。

この富士塚に富士登拝のできない老若男女が多数登拝して, 富士登山をしたのと同じ御利益を求められるとされていた。しかし, 富士講はとくに江戸中期以降に爆発的な人気を博したものの, 江戸幕府より富士講という集団が拡大することを危険とみなされ, 1740 年以降幕府は 5 回にわたって, 富士講の結成を弾圧することがあった。それでも, 富士講は地下に潜伏するなどして身祿行者以後の『三十一日の巻』などに代表される教理が整

キーワード: 富士山, 世界文化遺産, 人生儀礼, 富士塚, 同行

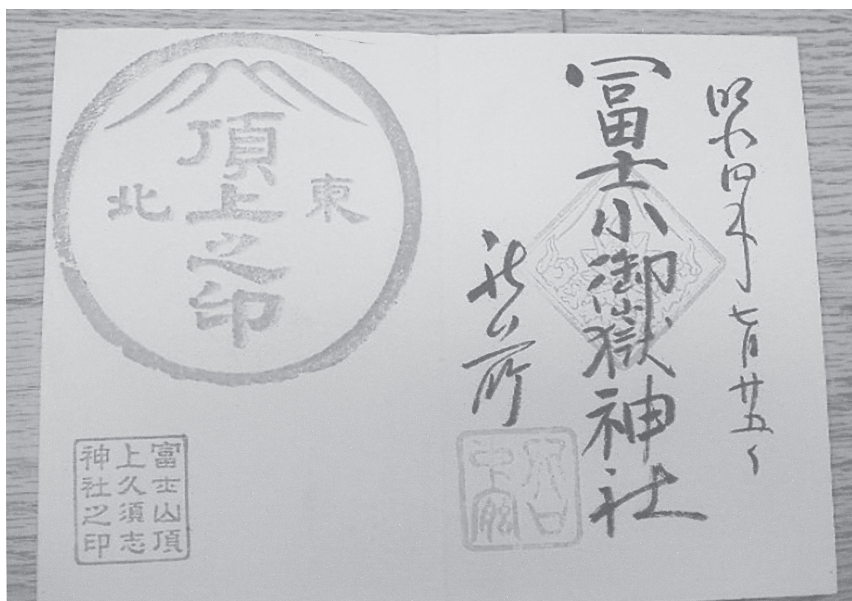


図1 昭和4(1929)年7月25日 富士小御嶽神社納経
(文京区ふるさと歴史館蔵)

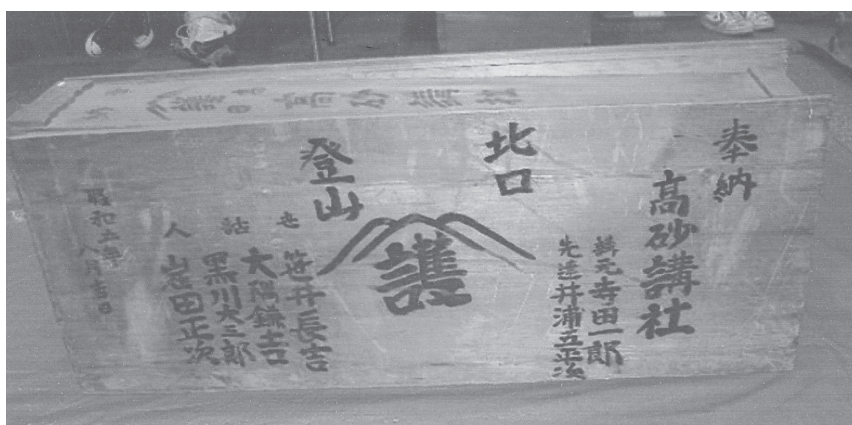


図2 昭和5(1930)年 高砂講社(富士講)の祭具保管箱
(文京区ふるさと歴史館蔵)

理されつつ発展し、武蔵国鳩ヶ谷宿(埼玉県鳩ヶ谷市)には小谷三志による「不二道」などが創設された。

不二道の基本精神には男女平等があり、他にやや遅れて創出されていた天理教(奈良県天理市・1838年中山みきによる開教)・金

光教(岡山県浅口市金光町・1859年赤沢文治郎により開教)などとは性格を異にしていた。この男女平等の精神的核になったのは、身祿行者の娘ハナを後継者に選出していることなど、女の穢れといった当時の常識を否定した面があったことを見出すことができる。

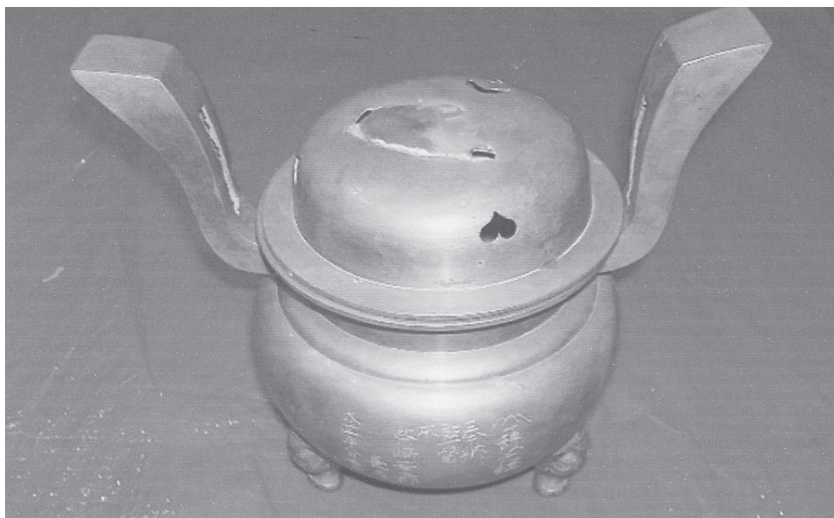


図3 文京区内の講中が保管する富士講の祭具

これをもとに明治以後、扶桑教・実行教・丸山教などの神道教派が江戸時代以来の富士講を母胎にしつつ再編成されていった。

しかし、近代の国家神道の名のもと富士講は扶桑教などに半ば軒先を借りるような信仰形態が展開していった。そのため大がかりな祈禱や梵天は姿を消したが、白装束で六根清浄を唱えながらの集団登拝をする姿は今日も伝えられている。また、江戸市中に多くの富士塚が築かれたが近年の宅地造成や道路の開削などの地域開発によって富士塚が破損もしくは消滅（東京都北区十条富士塚・葛飾区南水元富士塚）する所が多く、文化財の立場からもかつ今回の世界文化遺産に関わる条件の一つである「富士塚」の保護などと絡めた問題が生じている。

それでも、なかにはこの富士塚に毎年のお山開き（7月1日）に講中による集団登拝をする習俗が東京でも数か所確認されている。

現在、富士登山を行う講は少なくなり、月拝みやお焚きあげを行う講は減少の一途を辿っている。また、吉田口・北口・喜多口（山梨県富士吉田市）・須走・東口（静岡県駿

東郡小山町）などの富士登山口で富士講を対象に宿坊（民宿）経営を行っている御師（おし）も近年に至って激減している。

Ⅲ.『富士道中小遣覚帳』に通過儀礼を読む

富士講の面々の修行は、毎年、旧暦7月22日より8月2日まで山籠もりをし、3日に駆け越して、東口（須走）に下り東側の麓の各地をめぐる。登山道は全行程を十合に分け、一合目ごとに石室（山小屋）を設けていた。登拝習俗は宝冠をかぶり、木綿袈裟に白衣を着て金剛杖（図4）を携えるものであった。

近年の道中日記研究は歴史学や地理学からのアプローチが顕著であり、さらにこれまでの研究の多くは、新城常三³⁾に代表される社会経済史的側面からの道中日記の数量分析や、歴史地理学の小野寺淳⁴⁾、田中智彦⁵⁾らの道中の経路分析を中心になされたものがほとんどであったが、1990年代以降になると特に観光地域史を標榜した研究が社会史研究の延長線上で進められるものが多くなり、歴史学から青柳周一⁶⁾や原淳一郎⁷⁾らの研究があ

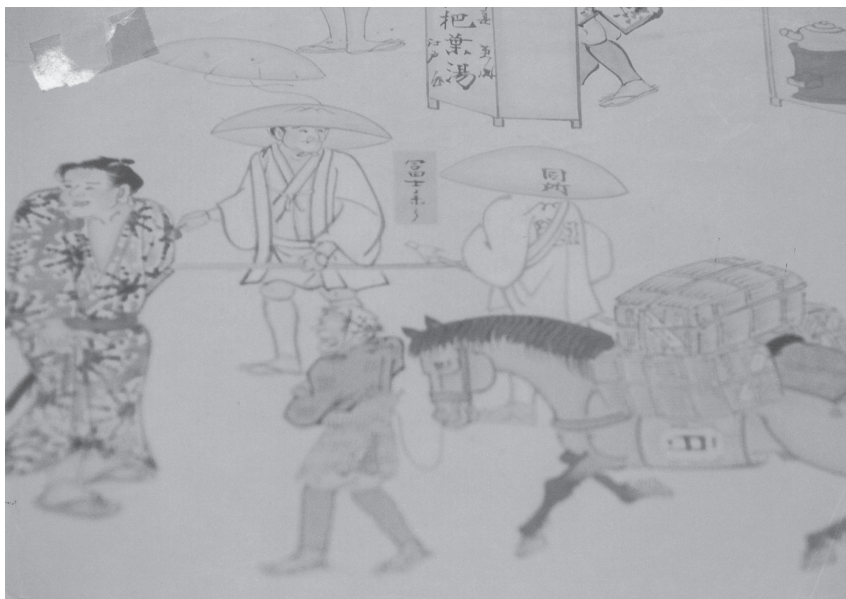


図4 江戸市中の富士参り
(元江戸東京博物館教授 小澤弘氏提供による)

り飛躍的な展開を見せている。

さらに特徴的なのは、参詣路の復元研究の多くが伊勢参宮に集中してきたことである。なかでも山本光正⁸⁾や櫻井邦夫⁹⁾などである。

今回紹介する山岳信仰に関連した史料と伝承をめぐる参詣経路の研究は岩鼻通明¹⁰⁾や田中智彦¹¹⁾をはじめとして山岳考古学からの時枝務¹²⁾などが見られるものの、富士山参詣に関連するものは見当たらないのが現状であるため紹介することとする。

以下に紹介する『富士道中小遣覚帳』は上野国邑楽郡狸塚村（現・群馬県邑楽郡邑楽町狸塚）の出井家に所蔵されていたものだが、現在は筆者が所蔵しているものである（図5）。史料には富士山参拝をめぐる上野国から参詣ルートを知るだけでなく、その行間から登拝に関わる興味深い人生儀礼をはじめ参詣道に見られる沿道住民との関わりなども知ることができるものである。

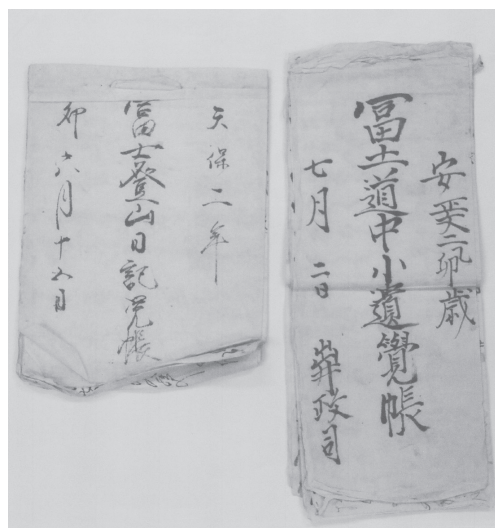


図5 富士道中小遣覚帳および富士登山日記覚帳
(筆者所蔵)

「 安政二乙卯歳
富士道中小遣覚帳
七月二日 出井政司 」
縦9.7cm・横24.1cm 袋綴（筆者蔵）

七月三日 出立

一 拾五文	べき祝
一 四拾八文	参銭
一 参拾貳文	中食にしめ
一 八文	梅干
一 拾六文	佐川渡シ 舟ちん
一 四文	すみ
一 三十文	砂とう
一 四拾文	利根川渡シ 舟ちん
一 四拾八文	醬中
一 百七拾貳文	新郷柳屋 泊り藤助
㇪四百十五文	
同 四日	
一 四拾文	新川渡シちん 三ヶ所休
一 六文	
一 八文	かんおん札代
一 八文	かんおん札代
一 拾文	かんおんやすみ
同	
一 六十八文	松山宿籠や 中食
同	
一 七文	御札代
同	
一 貳十文	とき川 舟せん
同	
一 五文	やすみ
同	
一 貳拾四文	だちん

一 百七十貳文	高萩亀屋兵七 泊りせん
㇪三百六十八文	
五日	
一 十六文	入間川渡シ 舟ちん
同	
一 六文	扇町休
同	
一 四文	橋せん
同	
一 十一文	灰嶋 やすみ
同	
一 廿八文	中食
同	
一 八文	八玉寺 休
同	
一	休
同	
一 廿八文	わらぢ 壺足
同	小間木の
一 廿四文	浦番所
一 十六文	御ちや 休
同	
一 十貳文	高尾山札
同	
一 七拾貳文	道普請 番人
同	
一 廿四文	玉川渡シ 舟せん
同	
一 廿四文	白砂糖
同	
一 百八十文	小佛峠泊り 武さしや権次郎

ノ 五百八文		一	三十式文	ろうそく	
六日				かつて手びき	
一	式十文	二瀬川	一	拾式文	はらい
		舟ちん		ノ 壺貫八十三文	
	同 百文	上野原		三十六文	たすき判代
		中食代		七日七時より	
	同		一	六十四文	安さん守
一	五十文	道普請	一	廿八文	わらち代
	同		一	九文	道つくり
一	六十式文	鶴川	一	十式文	小札
		うね越ちん	一	十三文	茶代
	同		一	十式文	父胎内
一	六十式文	鳥沢			参銭
		休	一	十式文	母胎内
	同			五 文	馬返し茶代
一	式百十六文	大月宿	一	式十四文	夕飯茶代
		丸木屋	一	拾式文	本社修復代
		久兵衛	一	四十文	上廻り参銭仕切
	ノ 四百八十式文		一	百文	五合五勺目
	外 十六文	酒代			泊り茶代
惣ノ 五百式文					定式
七日			一	廿四文	小御嶽礼参物
上文司様			一	廿四文	ろうそく壺丁
一	六十文	小札二十枚	一	廿四文	一合目より一神
一	十式枚	大札一枚			迄道つくり代
一	三十六文	たすき	一	拾式文	拝殿かんけ
一	四十八文	杖一本	一	四拾八文	案内人酒代
一	百式十式文	御山役料	一	廿四文	八合目茶代
一	百文	綿入損料	一	式百文	御八龍廻り参詣
一	四十八文	弁当夜飯			道つくり
一	六十四文	餅代	一	拾六文	茶菓子
一	百文	山案内強力	一	十式文	薬師札
一	式十四文	わらぢ	一	十五文	御籤参銭代
一	三百文	献上物	一	三十六文	わらち壺足
一	廿四文	すばしり	一	十六文	茶菓子代
		わらぢ壺足	一	式十四文	わらぢ
一	十式文	休	一	七十式文	中食代
一	八文	荷附	一	十六文	茶菓子代
一	五文	道つくり	一	三十式文	かみ結せん
一	廿八文	砂とう	一	百八十文	竹の下

	和泉屋	一 八文	渡シせん
	市右衛門	一 三拾六文	渡シ舟ちん
八日晚迄		一 四十八文	飯山
ㇼ 壺貫貳百十三文			中食代
九日		一 廿四文	わらぢ
一 八文	休		壺足
一 三十六文	小田原道	一 廿四文	休
	道了参詣山役銭	一 拾貳文	遊行寺案内
一 三十六文	御札代	一 八文	正中
一 十貳文	参銭	一 八文	さつま代
一 四十八文	山麓若木屋中飯	一 八文	船橋せん
一 十五文	休右茶代	一 三十貳文	江ノ島
一 廿四文	茶菓子代		舟ちん
一 百廿八	佐川渡ちん	一 参百文	同所宿せん
一 貳百文	飯すみ	一 貳十四文	酒代
	旅籠代	ㇼ 五百七十文	
一 貳十四文	寺へ茶代のう経	十二日	
	共	一 六十四文	江ノ島より
ㇼ 五百四十文			釜倉尔かつぎ
十日		一 十六文	休
一 貳拾貳文	のうきょうせん	一 四拾八文	ㇼ 四ヶ所長谷寺
一 拾六文	休茶代		田代寺 岩慶寺
一 七十貳文	子安宿		杵本寺
	中食代	一 百文	江ノ島三ッ岩廻
一 百五十文	大山参銭		り参せん
	番人共	一 十六文	休茶代
	道つくり	一 九文	参銭
一 三十六文	御札代三枚	一 十二文	長谷寺かへちや
一 拾六文	正中代		う
一 六文	日向薬札	一 三十六文	百番観音おい絵
一 貳百文	日向西泉坊泊り		代
	旅籠代	一 百文	鎌倉
ㇼ 五百貳十六文			中食代
外二		一 十六文	休
金壺兩貳分一朱也		一 十貳文	金沢八景
十一日		一 八文	此所山せん茶代
一 拾五文	飯山のう経さん	一 十五文	八枚武州金龍現
	せん		札所
一 拾五文	星之谷	一 貳十四文	惣参せん
	のう経	一 貳百廿四文	

〆七百十弍文	程か谷桑屋泊り	一 廿四文	わらぢ
	せん		壺足
一 拾六文	休 茶代	一 百七十八文	繪紙
十三日			三十六枚
一 拾六文	大師川原参せん	一 廿四文	休茶代
同		一 弍百三十弍文	千住泊り
一 四拾八文	大森宿		浪花屋
	中宿	〆五百八十弍文	
同		十五日	
一 拾六文	品川休	一 六十文	わらぢ
同			三足
一 拾弍文	高縄	一 四十八文	中食代
	千学寺	一 五十弍文	栗橋川
同			舟ちん
一 八文	蔵城寺	一 廿六文	休
	参詣	一 廿四文	嶋田川
同			舟ちん
一 八文	芝神明	〆弍百八文	
同		十三口〆	
一 八文	あたご山	一 七貫七百廿八文	
同		為金壺両弍朱三百四文	
一 六十文	墨筆代	奉納富士参詣	
同		仕候	
弍百文	菓子代	清右衛門	
百文	紙代	与右衛門	
	此分喜多屋迄遺物	泰三良	
〆五百文		政治	
十四日		同行四人	
一 十五文	浅草		
	参せん		
	のうきょう代		
一 十六文	さ若町		
	芝居		
一 十六文	上野参詣		
一 三文	しのはつ弁天		
一 三文	湯島天		
一 十五文	妻恋稲り		
	守参せん		
一	神田明神参詣致		
一 四拾八文	中食代		

狸塚村は近世期には上州館林藩の支配下にあり、1855（安政2）年当時の村高は583石余の村であった。史料的には近世後期の「富士参詣日記」として他にも多くの存在が確認されているが、本史料の最大の特徴は冒頭に「へこ祝」の記載があることから、若者たちの通過儀礼を伴った参詣日記であるということである。

しかし、10代前半と思われる大人とも子供ともつかぬ年齢なのか、あるいは北関東という地域的な問題からか、おそらく人生はじめ

ての上野国・武蔵国・甲斐国・駿河国・相模国そして江戸という世間を知るための「富士登山紀行」であったものと思われる。

史料的には誤字や当て字が多い。しかしその反面、これが逆に4人の同行衆がこの「富士参詣」を契機にして生涯の契りを結ぶとともに村の一人前として課せられた「修行の旅」であったことを思うと、微笑ましくなる「道中記」である。

誤字（単なる記載まちがいか？）の一部を掲げてみよう。

（灰嶋）やすみ……………拝島
（八玉寺）休……………八王子
（玉川）渡し……………多摩川
（釜倉）……………鎌倉
（高縄千学寺）……………高輪泉岳寺
（蔵城寺）……………増上寺
（新川）……………荒川
（佐川）……………酒匂川

などである。

上野国から富士山への日程についてみると、1855（安政2）年7月3日に狸塚村を出立して同月15日に帰村した、12泊13日の日程であった。これはいうまでもなく富士・大山の山開きをめざしたものである。さらに他の上野国から2ヶ月余の日程で行われた伊勢参宮などに見られるように、1月初旬に出立して3月の中旬に戻るものとは明らかに異なるものであった。さらに4人の同行衆が農作業の中心的な大人たちであれば、7月中に半月も家を留守にすることは農作業（田植えから1番・2番・3番の草取りなど）の関連から考えられない事で、その点からも若者たちの通過儀礼的な「富士・大山・江ノ島・江戸」の修行の伴う旅（世間を知る）であったと思われる。

参詣ルートとしては上野国を出て坂東太郎と異名をもつ利根川を渡り、松山（現・埼玉県東松山）・とき川（現・埼玉県比企郡とき

がわ町）・入間川を経て、灰嶋（現・東京都昭島市）・八玉寺（現・東京都八王子市）・高尾山（現・東京都八王子市）・上野原（現・山梨県上野原市）・大月（現・山梨県大月市）・上吉田（現・山梨県富士吉田市）の近世北口（喜多口）最大の御師であった「上文司」に立寄り、富士山頂をきわめて須走（現・静岡県駿東郡小山町）の東口に下山して、竹の下和泉屋（現・静岡県駿東郡小山町）に宿泊している。

和泉屋さんは近世を通じて、富士講の専門宿として栄えた宿屋であり、その他の東海道筋などからの江戸期の「道中日記」に度々登場している。

その後、大雄山最乗寺（一般に小田原の道了山「尊」として親しまれている曹洞宗寺院）を経て、佐川（酒匂川・小田原）を渡り、この後、同行衆は坂東の札所5番（飯泉山勝福寺・現小田原市飯泉）7番・8番（飯山観音一厚木市・星谷観音一座間市）をめぐりつつ、相模国の国御嶽である大山登拝（伊勢原市）を経て、江ノ島（藤沢市）に宿泊している。

江ノ島から釜倉（鎌倉）周辺の坂東の札所一番杉本寺をはじめとする寺院を巡拝したのち、金沢八景（横浜市金沢区）を経て、程か谷（横浜市保土ヶ谷区）に宿泊、次いで川崎大師（川崎市川崎区大師町）をお参りして、江戸に入っている。

江戸では泉岳寺・芝神明社・愛宕さん・浅草・上野・湯島・妻恋などの「江戸名所」を訪ね、その間ふるさとへの土産物として「墨」・「筆」・「繪紙」・「御守り」など、比較的荷物にならないものを大量に買い込んでいる。

富士登山の最後は千住の宿浪花屋にとり、翌15日に上野国に戻るというルートであった（図6）。



図6 富士道中小遣覚帳の参詣ルート

(ベースマップは大日本国全図、明治14年2月出版、一般財団法人情報センター提供資料による)

Ⅳ おわりに

以下に幕末の富士参詣日記を通して富士信仰（富士登山）に関わる記載に注目してコメントを寄せることにする。7月5日にある「一十式文 高尾札」とある記述は、単なる高尾山の札を求める以上に、とくに上野国・下野国・武蔵国方面から甲州街道を利用する富士の導者たちは、ほとんどが富士登山をする前

に高尾山参拝をしていたことが近世・近代からの文献からも確認されており、かつ現在の拝島・八王子・高尾山周辺では富士の導者から「ひっきょうひっきょう銭くれよ一文なしのやけ導者」などと「合力銭」をねだる習俗があったことも、伝承かつ高尾山麓の浅川（八王子）の石川日記にはその旨が紹介されている。

7月7日にある「一 百文 綿入損料」とは

山小屋（近世・近代では室と称している）に宿泊するときの防寒具（どてら）の使用料のことである。どてらには富士講中の山印（笠印）や講中名などが染め抜かれ、とくに北口御師のなかでも「上文司」や「大国屋」・「浅間坊」「数珠屋」などの傘下にあった「講中」などでは、自前のどてらや、薬缶・夜具などを所有していたこともあった。

同日にある「一 六十四文 餅代」も富士山中で食べる餅代だけでなく、北口の御師集落では一夏に千人以上の宿泊者を受け入れた宿坊では、導者たちを中心に「チン餅」と称される餅が振舞われたこともあり、この回数が多ければ多いほど導者にとっても地域住民にとっても一喜一憂する儀礼であったのである。そのほかにもこの史料には、多くの民俗事象を裏付けるものが散見しており、文献との相互検証を試みることが可能となるであろう。それにしても政司（政治）さんを先達役として4人の同行衆は2週間に及ぶ、村の一人前になるための儀礼として富士登山を決行し、その道すがら多くの苦行だけでなく、知見を広め、その後の村の成員としての精神を培ったものと思われ、それが冒頭にある「べき祝」（禪祝）を象徴しているようである¹³⁾。

（古橋懷古館館長）

〔注〕

- 1) 拙著『富士・大山信仰 山岳信仰と地域社会：下』岩田書院，2008。
- 2) 前掲1)
- 3) 新城常三『社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房，1964。
- 4) 小野寺淳「伊勢参宮道中日記の分析」東洋史論2，1981，1-8頁。
- 5) 田中智彦『聖地を巡る人と道』岩田書院，2004。
- 6) 青柳周一『富嶽百景－観光地域史の試み－』角川書店，2002。
- 7) 原淳一郎『近世寺社参詣の研究』思文閣出版，2007。原淳一郎『江戸の寺社めぐり 鎌倉・江ノ島・お伊勢さん』吉川弘文館，2011。
- 8) 山本光正「旅日記にみる近世の旅について」交通史研究13，1985，69-84頁。
- 9) 櫻井邦夫「近世における東北地方からの旅」駒澤史学34，1986，144-181頁。
- 10) 岩鼻通明「道中日記にみる出羽三山参詣の旅」歴史地理学139，1987，1-14頁。
- 11) 前掲5)。
- 12) 時枝務「日記史料と民俗－『大和泉日記』をめぐって－」（和田文夫先生頌寿記念論文集刊行会編『民俗と考古の世界』，2000），49-65頁。
- 13) 拙著『旅と祈りを読む』臨川書店，2014。